

# ARCADIA

80  
AUTUMN 2019

Okazaki City Museum News



岡崎市美術博物館  
【マインドスケープ・ミュージアム】

岡崎市美術博物館ニュース  
【アルカディア】

# 眼の極楽<sup>(29)</sup> 花と鳥のかたち

館長 榊原 悟

## 鳥と虫の所縁(上)

『花鳥図』(図1) 出光美術館蔵、これこそがもう一点の作だ。筆者はなんと曾我宗誉。『唐人物・花鳥図団扇』と同一人物というのが何とも嬉しいし、都合がいい。

その図柄。枯れ枝に留まる尉鷗を見て欲しい。下方をジッと見つめる。その姿、何処かで見たことはないだろうか。そう、まさしく信春三幅対の左幅に登場したあの尉鷗だ。それら二羽の姿かたちは、羽毛の模様も含めて一方からもう一方へ、それぞれ入れ換えても分らない程に酷似する。しかも尉鷗が留まる枯れ枝の屈曲やあしらい、そのかたちにも通じ合うところが少なくない。

加えて画面向かって左下隅を扇の要のようにして、出光本では岩、薔薇、笹などを、信春三幅対本では萱草の蕾や花、葉を、それぞれ扇の弧上に配した図様構成も、ほぼ一致する。となると信春が京博三幅対の左幅を描くについては、出光本からの図像情報があったのではないか。枯れ枝に留まる尉鷗のかたちの一致は、そう思わせるに足る。

異なる点もある。出光本の尉鷗は下方を見つめると云ったが、特に見つめる対象が描かれているわけでもない。これに対し信春本では、そこに虻が飛ぶ。これを餌として狙っていたのだ。そうであればこそか、いま酷似すると云った尉鷗も、信春本のそれは頭部と嘴を前方に突き出し、鋭角的なかたちを採る。次の瞬間、飛び立つため身構えたのだ。鋭角的なかたちは、その一瞬の緊張感に攻撃性を伝えて余りある。これと較べれば、出光本の尉鷗のずんぐりした姿は何とも呑気。信春本の尉鷗の表現に一日の長を認めるべきだろう。また尉鷗の重さを受けたからなのだろうか、枯れ枝の撓みを大きくしたのも信春本の優れたところだ。

その狙われた虻。これの図像情報が真珠庵本団扇図に求められる可能性のある点については既に指摘した。信春が当の団扇

画を実際に目にするには無かったにしても、

である。そこで想定したのが、粉本の存在であったはずだ。図像伝授はその粉本を通じてなされたのではなかったか。それを示唆する図像も出光本に描かれていた。

改めて宗誉の出光本『花鳥図』を見て欲しい。画面下部、笹の葉に隠れるように頬白を思わせる鳥が一羽、枯れ枝に留まる。こちらも尉鷗同様、見つめる視線の先に見つめる対象が、何も描かれていない。上方の尉鷗が背側を見せるのに対し、頬白は腹側を見せる。頭部の向きもまさしく正反対。両者は合わせ鏡の影像に見るような関係にある。しかしこれではこの頬白は、岩が邪魔して飛び立つことさえ儘なるまい。だが二羽の対照的なかたちの提示に描写の主眼がある以上、頬白の位置は無理でも此所だろうし、敢えて視線の先に小さな虫を飛ばす必要もなかったのだろう。面白いのは、その頬白と同種の姿が、真珠庵の団扇本の一図にも見出せる点である。「紅椿に小禽図」(図2)に登場する小禽が、それである。筆者もむろん宗誉。となると宗誉には、自らの画囊の肥しとして、こうした鳥を描くための粉本が確かにあったのだろう。すでに信春が三幅対の左幅に尉鷗を描くについても、出光本からの図像情報があった可能性を指摘した。もとより信春が出光本を直接目にするには、余程の偶然が重ならなければ難しい。となれば、ここでも粉本を介在させて図像情報の伝授があったとみる方が余程合理的で、実際に近い。その粉本は、宗誉が持っていたそれを写したものか、いや、さらにそれを写したものとみるべきだろう。二次的、三次的に模写された粉本である。信春はその粉本を目にする機会があった。早速、それを写し取り、京博本三幅対の尉鷗を描くに際し、その図像粉本を用いた。まさしく画囊の肥しとして。

問題は、それをなしたのが信春時代、それも上洛後間も無い時期に、である。本当にそんなことが可能なのだろうか。可能ならば、可能にさせた何か特殊な事情があったからなのか。それを考える手掛りが狩野一溪(一五九九〜一六六二)の『丹青若木集』「等伯伝」の一節にあった。

等伯 初者越之前州人 師曾我紹祥 後來于洛下 (後略)

等伯(信春)は、曾我紹祥を師としたと云う。その紹祥についても『丹青若木



図1：宗誉 曾我宗室 出光美術館蔵 《花鳥図》



図2：宗誉 曾我宗室 大徳寺真珠庵蔵 《紅椿に小禽図》 「唐人物・花鳥図団扇」のうち

集」は、

曾我氏紹祥 者居越之前州 所画視人物花草 士氣雖乏 柔而有異風

至花草者要 写生 所絵花鳥草蟲為上矣 有長谷川等伯初師紹祥云々。

と述べ、信春の紹祥への入門を言い添える。等伯の伝記史料として周知のものが、他にこれを伝える史料もないためか、従来、言及するに留め、さらに踏み込んで検証されることもなかった。だが本当にそれでよいのだろうか。しかもここで信春の曾我派入門の事実を述べる必要はないはずだ。それを敢えて述べたのは、ことさらこの事実を強調しているようにさえみえる。その真意は…、後にいまい一度触れたいが、もう一点、紹祥が草蟲も描いていたと伝えている点を見逃してはなるまい。

が、それはともかく紹祥とは、言うまでもなく、

兵部墨谿―式部・夫泉宗丈―兵部紹仙―宗嘗―紹祥

と画系を繋いだ曾我派の絵師。宗嘗の後継者である。当然、宗嘗に係わる、と云うより曾我派一門に蓄えられた粉本Ⅱ画像情報は、紹祥のもとに在ったはずだ。むろん紹祥門に入った信春も、それらの粉本を見せられたに違いない。それらの粉本を忠実に模写することが、画を学ぶことに他ならないからだ。その中にあの枯れ枝に留まる尉鷯の画像もあったのではないか。これが、京博三幅対本と出光本の尉鷯が酷似する事情だろう。いや、さらに信春は蛇の画像も同様にして自らその画囊に入れたはずだ。つまり、これら鳥と虫のかたちの酷似Ⅱその所縁は、信春の紹祥・曾我派入門を物語る以外の何ものでもない、と云うことだ。能登の田舎絵師信春が、洛に上り、絵師として活躍したい―そんな夢と大志を抱いたのなら、その夢の実現のため何が必要か―その方策として隣国越前の太守朝倉氏と、そこへ出入りする曾我派と接点をもつことがどれ程有効か、思い至るのはむしろ当然だろう。『丹青若木集』が伝える等伯Ⅱ信春の曾我派入門は事実なのだろう。

となると信春の上洛の次第にも異なった事情を想定できるのではないか。従来の説明では、その上洛に信春の生家奥村家の檀那寺・七尾の本延寺と、京のその本山・本法寺、二つの法華宗寺院の本末関係が主要軸として大きな力となったとされてきたが、これとは別に曾我派がその上洛に果たした役割りも大きかったのではなかったか。前者が生活者としての信春を支えたと云うのなら、後者は絵師としての信春の力となったのだろう。むろん曾我派ならば、その始祖とも目される兵部墨谿

が一休の頂相を描いているように、一休Ⅱ真珠庵とも所縁が深い。信春が上洛後間もなく真珠庵へ出入りできたのも、この曾我派ルートのお陰であろう。天正十一年新装なった永徳の聚光院襖絵の評判を聞き、早速これを見ることのできたのも、曾我派Ⅱ真珠庵からの紹介・口添えによるのだろうし、さらに慶長六年真珠庵方丈檀那の間と衣鉢の間の襖絵制作に起用され、あまつさえその室中「四季花鳥図襖」の東側南寄り二面分の補作の命を受けたのも、曾我派入門という所縁があったればこそだろう。言うまでもない、「四季花鳥襖」こそは夫泉宗丈の作、その補作の絵師として曾我派の画系に連なる信春の起用はむしろ当然、と云うより最大の要因となつたに違いない。信春と曾我派の鳥と虫の所縁は、それを物語る。

いや、それだけではない。信春の曾我派学習・入門の事実は、こののち「白雪舟五代」と称した信春（等伯）自身の画系認識に対しても疑義の眼を向けざるを得ない。むろん「信春」は「しんしゅん」と読まれるはずもない。そう読むのは信春を、雪舟門の等春の画系に連なる者として、その画号と考えたからで、その画系に疑問符が付いた以上、「信春」は、あくまで名として「のぶはる」と読むべきだろう。また「白雪舟五代」は、既に早く山根有三氏が説いたように、名門狩野派に対抗するためには、こうして当時名声を博していた「雪舟の系統である事を称するの」が、一番賢明な方法（山根有三「等伯研究序説『美術史』1号 一九五〇年）と考えた等伯が思いついた、いわば苦肉の策と云うべきか。もとより後付けであるが、それはまた等伯Ⅱ長谷川一門の正統派宣言でもあったから当然、雪舟後継を自認する狩野派が、これを容認できるはずもないし、するはずもない。となれば先に一溪が、あたかも駄目を押すかのように二度にわたって等伯の曾我派入門を述べた真意も、おそらくここにあつたのだろう。等伯が雪舟の正統を継ぐ者でないこととことさら強調するためである。明確な等伯批判であるが、狩野一門の絵師として当然の発言だろう。そう云えば狩野永納の『本朝画史』も等伯の「白雪舟五代」宣言に対し、

不知其实也

とそっ気ない。と、またまた本題から外れてしまった。話を鳥と虫の所縁にもどそう。

問題は、その信春が学んだ曾我派の、あの宗嘗の『花鳥図団扇』に、どうして虫が、それも蛇が描かれているに至ったか、である。

会期：2019年9月28日（土）～11月10日（日）

# 鶴田卓池と 三河の俳諧 —蕉風俳諧の系譜

板谷 寿美



鶴田卓池他画賛  
《岩花園并句》  
岡崎市美術博物館蔵

## 鶴田卓池。

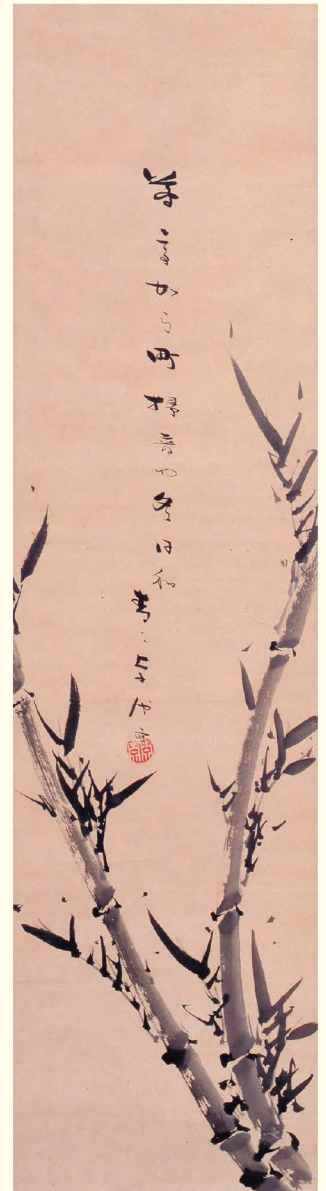
この人物の名前は覚えていただけましたか？  
前号の「ただいま準備中！」で紹介した、「つるたたくち」です。（なんのことかさっぱりだ、まだ読んでいないぞ！という方はすぐに美術博物館かHPへ。）

今回は、「準備中！」ではなく、「まもなく開催！」ということで、展覧会の内容を少しのぞいてみましょう。

まずは第一章。卓池は蕉風俳諧を大成させた松尾芭蕉の系譜をひきます。芭蕉の名古屋での蕉風開眼に始まり、加藤暁台・井上士朗の中興俳諧を経て、卓池に至る蕉風の系譜をたどります。

第二章では卓池の生涯を、卓池が関与した句集を紹介しながらたどります。三河での俳人としての中心的存在、さらには天保四老人として全国的に名をはせることになる卓池の生涯に迫っていきます。

第三章では三河地域に多く残る卓池作品を紹介します。句賛を入れた軸物・扇面などは多く残り、美術博物館にたくさん収蔵しています。どれもこれもお見せしたいのですが、その中から選りすぐりの軸物や扇面、屏風など紹介します。



鶴田卓池画賛《竹図并句》  
三河武士のやかた家康館蔵

第四章では、芭蕉・卓池研究で著名な故大磯義雄氏（愛知教育大学名誉教授） 収集の和本書籍や軸物を展示します。これらは岡崎市に寄付され、「大磯義雄文庫」として岡崎市美術博物館に収蔵されています。ここでは、文庫のなかから主なものを紹介します。

さらに今回の展覧会はイベントなどもたくさん用意しています。その中で三つ紹介します。

一つ目は講演会です。服部直子氏、寺島徹氏そして加藤定彦氏という俳諧の代表的研究者をお招きし、ご講演いただきます。日程はいずれも十月月中で、服部氏は五日（土）、寺島氏は十二日（土）、加藤氏は二十七日（日）に開催します。毎度の講演会同様、聴講は無料です。卓池のことのみならず、蕉風俳諧から三河の俳諧まで、俳諧の世界の全貌を知る貴重な機会ですのでお見逃しなく。

二つ目に十一月二日に行われるバスツアーです。満性寺（菅生町）や安心院（明大寺町）、誓願寺（矢作町）、西光寺（鴨田町）など、芭蕉や卓池の句碑をめぐる予定です。より身近に卓池の足跡を感じられる貴重な機会です。

三つ目に展示をより楽しんでもらうためのワークシートです。子どもに限らず、大人の方も展覧



鶴田卓池賛・草龍画《山葡萄図并句》  
岡崎市美術博物館蔵

会でより楽しく鑑賞するための道具として、手に取ってほしい一枚です。また子ども向けワークショップも企画しています。

そして、今回の展覧会は岡崎市在住の六十五歳以上の方と小中学生は入場無料です！

さらに、造形おかさきつ子展の開催日には、大人の方（高校生以上）は半額で入館できます。家族みんなで、またお友達とともに、展覧会に足を運んでいただけることを楽しみにしています。

## 限定!! 公式グッズ情報

卓池展では図録を販売します。卓池に関係する和書や本展初公開の掛軸などを多数掲載し、講演会で登壇していただく服部直子氏、寺島徹氏、加藤定彦氏による論考も収載します。松尾芭蕉が完成させた蕉風俳諧を継承する鶴田卓池の人となりや門人との関係など、三河の俳諧を通覧できる一冊です。

現在、図録は担当学芸員が目を皿にして、鋭意作成中です。開幕後、実際に手にとってお楽しみください。

## 注目!! イベント情報

卓池の俳画と俳句の魅力をより深く味わうためのイベントが目白押し！是非当館にお越しください。

### [1] 講演会①「江戸時代前期の岡崎の俳諧—岡崎と蕉風—」10月5日(土)

講師：服部直子氏（愛知県立大学非常勤講師）

### 講演会②「暁台・士朗と卓池について」10月12日(土)

講師：寺島徹氏（金城学院大学教授）

### 講演会③「俳人卓池の人と作品—俳と画と旅—」10月27日(日)

講師：加藤定彦氏（立教大学名誉教授）

各回共通

時間：午後2時～  
当日午後1時30分から  
整理券配布・開場  
会場：当館1階セミナールーム  
定員：先着70名、参加無料

### [2] バスツアー「芭蕉・卓池の句碑をめぐる」11月2日(土) 午後0時30分～午後5時【雨天決行】

目的：松尾芭蕉や鶴田卓池にかかわる岡崎市内の句碑や寺院をめぐり、卓池と郷土の歴史を探ります。

コース：当館出発、当館着。満性寺（菅生町）・安心院（明大寺町）・誓願寺（矢作町）・西光寺（鴨田町）

定員：25名（応募多数の場合は抽選）、参加無料 申込締切：10月11日（金）必着

### [3] 子どもむけプログラム「びょうぶってなあに？」

10月14日（月・祝）、11月4日（月・祝）いずれも午前10時30分～、午後2時～（各回約1時間30分）

内容：展覧会を鑑賞して、屏風の仕組みを学びながらミニ屏風づくりをします。

場所：当館1階展示室ほか（同伴者は当日の観覧券が必要です） 対象：小学校4～6年生

定員：各回10名ずつ（応募多数の場合は抽選）、参加無料 申込締切：各日とも10月5日（土）必着

※[2][3]の申込方法は、展覧会チラシ及び当館HPをご覧ください。

### [4] ギャラリートーク 10月6日(日)・20日(日) 各日とも午後2時～

会場：当館1階展示室 ※参加無料（ただし当日の観覧チケットが必要）

Exhibition  
企画展

ただいま準備中!

●会期：2019年11月23日（土・祝）～2020年1月13日（月・祝）●

Roots of Kawaii  
内藤ルネ展

～夢見ること、それが私の人生～

今、岡崎の街を歩くと、瞳の大きな女の子や愛らしいパンダのポスターを市内のあちこちで見かけます。キャラクターの生みの親は、「Roots of Kawaii」と称されるマルチクリエイター内藤ルネ（一九三二—二〇〇七）。可愛くてどこか懐かし、それでいて今見てもオシャレです。昭和三〇年から五〇年ごろにかけて雑誌のふろくやファンシーグッズなど多くを手掛け、その可愛らしさは全国の女の子たちを夢中にさせました。身の回りで実際に使ったり親しんだりした記憶がある方も多いのではないのでしょうか。

実は、内藤ルネ（本名…内藤功）は岡崎市出身。現在のJR岡崎駅の近く（岡崎市羽根町）に生まれました。岡崎市内のルネ熱の高まりとともに当館では、生誕地での大回顧展

を今秋開催するために、ただいま鋭意準備中です。初出展作品約二十点を含む貴重な作品を約三百点展示する予定で、特に、岡崎市内に残るルネのエピソードやゆかりの資料をできる限り集めています。

存命だったら今年で八十七歳のルネ。岡崎市立岡崎国民学校（現・岡崎小学校）時代の同級生の方々や恩師のご家族、縁戚の方、生家のご近所さんなど、たくさんの方々から情報が続々と寄せられました。ルネは「イーちゃん」の愛称で親しまれ、ままごとをして遊んだという小学校時代の同級生たちとは、著名になった後もあたたかな交流を続けていました。ルネはビリケンさんをはじめたくさんプレゼントを贈っており、それらには銀のペンでサインと日付がひとつひとつ丁寧に入っていました。また、底抜けに明るい文体でピッシリと思いをしたためた手紙には、相手を思いやる言葉が並び故郷・岡崎への思いも綴られています。小学生時代の集合写真には、着物を着た幼いルネが恩師や級友たち



同級生に贈ったサイン入りのビリケン人形（個人蔵）

と並んで少し緊張した面持ちで写っています。

みなさん口をそろえておっしゃるのは、ルネの愛すべき人柄。「人を悪く言うところを見たことがない」「心やさしくてかわいい人だった」「美しいものが大好き」などなど、ルネについての思い出を語る時、自然と優しい笑顔になるのが印象的でした。

トビキリ可愛くて、ちよっぴり懐かしくて、今でも斬新なアイデアに満ちているルネ作品の数々。作品を楽しみつつ、岡崎で育まれた温かから愛らしいルネの人柄にも触れられる本展を、どうぞお楽しみに！そして、「おかりなさい！ルネさん！」、その作品たちに声をかけてください。



岡崎尋常高等小学校2年生集合写真 昭和15（1940）年撮影（個人蔵）  
1列目 右から7人目がルネ

## ルネ展 関連イベント

講演会①

「内藤ルネの光と影」

講師：中村圭子氏（弥生美術館 学芸員）  
講演日：11月30日（土）

講演会②

「内藤ルネと性的マイノリティーの歴史」

講師：笹井孝介氏（NHK制作局 ディレクター）  
講演日：12月8日（日）

時間：午後2時～

（当日午後1時から整理券配布・開場）

会場：当館1階セミナールーム

定員：先着70名

■ルネ♥ぬりえ

会期中、どなたでもご参加いただけます。

■Marchè RUNE

ルネグッズ販売コーナー

力作は館内に掲示します！



三河もち豚のピゴス

## 召しませ！ Museum

### レストラン コラボメニュー

「琉球の美」展では、ずばり沖縄名物をおしゃれにアレンジした「沖縄ソーキのジェノベーゼ」と「沖縄風黒糖クレープ」。「キスリングクーエール・ド・パリの煌き」では、地元食材・三河もち豚を使用して、キスリングの故郷・ポーランドの伝統的な煮込み料理・ピゴスに仕上げた「三河もち豚のピゴス」を提供いたします。

どの料理もおいしく、また「そんな料理があるんだ！」と新しい発見が尽きません。目で作品を楽しんで舌で料理を味わう、コラボメニューの今後にご期待ください。

(酒井明日香)



グラージュ



沖縄ソーキのジェノベーゼ

美術館に行く目的として、展覧会を見るのはもちろんですが、展示を見終わってからのコーヒースタンドにゆっくりする時間、おいしい食事を囲んで気の合う友人と感想をおしゃべりする時間もまた贅沢ではないでしょうか。当館では併設のレストラン「ユアテーブル」さんのご協力をいただき、展覧会にあわせた「コラボメニュー」を提供いただいております。

例えば今年度のコラボメニューは、「チエコ・デザインー〇〇年の旅」展では、チエコの家庭料理である「グラージュ」(牛肉の煮込み料理)。

## 「琉球の美」返却の旅

湯谷 翔悟

資料を返却した帰りの新幹線で缶ビールを一口飲んだとき、ようやく展覧会の終わりを実感するんだよ。大学時代に博物館実習に行った先の学芸員が言ったこの言葉。何となく心に残っていた言葉です。

七月十五日に閉幕した展覧会「琉球の美」。お借りした資料は国宝をはじめデリケートなものが多く、さらに沖縄への返却は陸路二日に海路一日の長距離の行程。家に帰るまでが遠足というけれど、展示担当にとっては資料を返すまでが展覧会。七月二十日、気が抜けないまま岡崎を発ちました。

陸路は台風で高速道路がまさかの通行止め。でも出航とのタイムアタックになっても、資料第一なのが日通の美術品専門スタッフ。資料に影響がないように一定の運転速度を保ちながら、的確な判断で無事に鹿児島に到着します。そこからは、まる一日の船の旅。前日の豪雨が嘘のような快晴と穏やかな海。綺麗だなあ、と思うよりも先に、資料への影響が少なくて済みそうなのことにホッとします。

沖縄に到着してからは各館での点検に立ち合います。万全の対応をし

ていても、何百年の時を経た資料たちなので、予期せぬアクシデントがないとは言いきれません。点検の間はピンと張り詰めた時間が続きますが、「はい、大丈夫です」とのご所蔵者の言葉の後は、途端に空気が穏やかになります。所蔵者・借入者・美専スタッフと立場は違っても、無事に資料が返せたことの安堵感が共有される良い時間です。

全ての返却が終わり、ヘトヘトの体で空港へ。帰路の飛行機で飲めたのはさんぴん茶でしたが、一口飲みこむと、思わず「終わった…」と口からポツリ。ああ、ホントだ。



## 2019年度展覧会ラインナップ

### ■Roots of Kawaii 内藤ルネ展

～夢見ること、それが私の人生～

11月23日(土・祝)～1月13日(月・祝)

キラキラ光る丸く大きな瞳のファッショナブルな少女たち。1950年代半ば以降、日本国中の女性たちを虜にした代表的な少女像は、岡崎出身のマルチクリエイター・内藤ルネ(1932-2007)によって生み出されました。

現代にも脈々と続く「カワイイ」文化の生みの親であり、「Roots of Kawaii」と称されるルネ。生誕の地、岡崎でのエピソードを掘りながら、貴重な原画・作品と共に人間ルネに迫ります。



『ジュニアそっくり』第33号 1960年  
個人蔵

©R.S.H/RUNE



『ピンクの少女像』1959年  
色鉛筆、鉛筆、水彩、ペン、紙  
弥生美術館蔵

### ■暮らしのうつりかわり

1月25日(土)～3月22日(日)

私達は、昔も今も、毎日の暮らしの中でたくさんの道具を使っています。道具は暮らしをより良く、便利に変えようとする人びとの欲求、願いとともに工夫されて変わってきました。

今回で8回目となるこの展覧会は、美術博物館が所蔵する古い生活・生産道具などの寄贈資料を中心に紹介しながら、私達の暮らしがどのように変わってきたのかをたどります。そして、この時期の公立小学校3年生の社会科「古い道具と昔の暮らし」をお手伝いできるように、子ども達の見学に配慮した内容と工夫を凝らし、昔の道具を間近に見てもらう機会を提供することにより、今の暮らしを考える手助けとなればと考えます。



昭和30年代  
茶の間の風景再現  
(昨年度展覧会の様子)

## 本多家シンポジウム開催!

明和6年(1769)、本多家が岡崎藩主に襲任しました。それから250年となることを記念して、徳川四天王本多家とその家臣団にスポットを当てたシンポジウムを開催します。

日時: 令和2年2月16日(日) 午後1時開演(午後0時30分開場)  
場所: 岡崎信用金庫本店2階大ホール  
講師: 小宮山敏和氏(国立公文書館)  
石神教親氏(桑名市ブランド推進課)  
水野伍貴氏(歴史と文化の研究所)  
湯谷翔悟(当館学芸員)  
堀江登志実(司会、当館学芸員)  
定員: 250名(当日先着)



《本多忠勝像》 岡崎市美術博物館蔵

編集  
後記

ミュージアムに来て作品を味わうのはもちろんですが、当地ならではの(しかもオシャレな)ショッピングとグルメも合わせて楽しみたい!という方が多いのではないのでしょうか。そんな欲求も当館にお任せを!「YAGURA[ヤグラ]」では、自分好みのちょっと小粋なアイテムがきっと見つかりますし、岡崎市街を見下ろせる「YOUR TABLE[ユア・テーブル]」では期間限定の展覧会コラボメニューを味わえます。アルカディアでは、展覧会情報に加えて館内の最新情報やプラスアルファの楽しみ方もご紹介しています♪チェックをお忘れなく。(鏡味)

表紙図版: 鶴田卓池画賛《六俳仙図并句》 岡崎市美術館蔵



岡崎市美術博物館  
[マインドスケープ・ミュージアム]

開館時間: 午前10時～午後5時  
(入場は午後4時30分まで)  
休館日: 毎週月曜日  
(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第80号 2019年9月発行  
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)  
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内  
TEL 0564-28-5000(代表)

ARCADIA